

特集 リスニングからの導入

授業における リスニング指導

見上 晃

(拓殖大学)

リスニングによって指導を 行う基本的考え方

実践的なコミュニケーションを指導の目標としたとき、最初に指導しなければならないのはリスニングである。生徒にはできるだけたくさんのインプットを与えたい。このとき文字で与えるのでは時間がかかりすぎる。文字は受け手である学習者のペースで読むことになるからである。

いつまでもある文字に比べて、音声はその場で消えていってしまう。文字は消えていかないので、学習者は自分のペースで理解していけばいい。しかし音声は発話した端から消えていってしまうので、聴取者は自分のペースではなく発話者のペースで理解していかなければならない。相手の速いペースに合わせなければならない。実際の会話でも、ゆっくり話してくれ、と言ってもすぐに元のスピードに戻ってしまうことが多い。つまり音で英語を導入することは教授者のペースで理解させていくことになり、理解の速度を教授者がコントロールすることができる。これを利用してできるだけ短い時間で大量のインプットをさせることが大切である。

スピーキングはこの十分なインプットがあってから行なえばいい。自然に英文が口から出てくるようになってから、意味を考えてスピーキングに移行する。さらに学習者が速いスピードに慣れていれば、会話練習も短時間で行うことができる。文字を使ったコミュニケーションも重要であるが「実践的コミュニケーション」という場合、従来よりも音声によるコミュニケーションに重きが置かれる。

また私たちは（特に私は最近）、自分の行動を口に出していることがある。「最初に本屋に行って、

その後でデパートに寄ればいい」、などと言っている自分に気がついて恥ずかしくなることがある。しかし文字でこのようなことはない。気がついたらこれからの行動をメモに書いていた、などということは聞いたことがない。こう考えると私たちの思考というのは音声に近いのではないだろうか。「英語で考える」ということがあるが、このとき正しい音声が出てこない場合は、母語の発音などで代用して考えているのではないだろうか。apple と言いたいのにそれが言えないのでアップルと言っている。apple のような実際の英語音ではなく、アップルのような母語の発音を基礎とした疑似英語音を用いるなら、思考用の疑似音と発声用の音声を使い分けるというさらなる負荷を与えていることにならないだろうか。いったん頭の中に正しい音像ができあがればどう発音したらいいかを考える必要はなく、何を言いたいかを考えれば自然に発音できる。口から出る文は考えなくても自然に発音できようになり繰り返し口頭練習する必要がある。そしてさらに意味を考えれば言いたい文が自然に出てくるように繰り返し練習することも必要である。

ヒアリングかリスニングか

以前はヒアリング教材だとかヒアリング指導といったことばをよく聞いたが、最近はあまり聞かなくなった。一般にhear という動詞は「(聞こうとしなくても)聞こえてくる」という意味でとらえるため、ヒアリングは指導できないということであろうか。

脳の研究をしている人の中には脳は並列処理をするので、それを真似たコンピュータの並列処理モデル(PDP モデル)を作りその動きから脳の働きを探っている人たちがいる。例えば、PDP モデルに

動詞の過去形を教える。最初に規則変化する動詞を学習させ、定着したところで不規則変化する動詞を加えていく。するとこのモデルは *taked* のような人間と同じ間違いを犯す。しかもご丁寧に今まで学習できていた *look* の過去形を間違えたりする。

このことからこの PDP モデルは人間の脳の働きを再現していると言ってよいと思われる。そこでこのモデルにア、イ、ウ、エ、オの音声を教えたとする。その後で [æ] を導入するとアだとか、エだとか答える。[æ] は出てこない。何度やっても同じで正しい答えは出ない。そこで [æ] を導入した後、アやエと答えたら間違いを指摘し、繰り返し練習させると [æ] を正しく答える。

このことから人間の学習者（中学生）の中にも、せっかく正しい発音を指導しても自分が間違っていることを繰り返し指摘しないと自分が誤っていることが分からないでいるケースがあると考えられる。

古く構造言語学の時代にはこのような練習はよく行われた。LL (Language Laboratory) の初期の利用法はこのような単音の聞き取りであった。ミニマルペアを繰り返し聞き、違いを聞き取る練習をした。このためか構造言語学の時代に LL で学習した学生の中には、それ以前より音を正しく聞き取る者が多く見られた。

私はこのような音そのものを聞き取ることをヒアリングと呼ぶ。最近ではリスニング（意味を考えて内容を理解する）指導が中心であるが細部にわたる聞き取りを行う場合、ある程度はヒアリング指導が必要であると思われる。

このヒアリングに比べてリスニングでは、音以外のいろいろな条件を考えながら総合的に「わかる」ことを目指さなければならない。音以外に文法、語法、状況、人間関係といったものが考慮されなければならない。このことは「予測」することであり「話の流れを読む」ことでもある。折に触れて色々な側面から「理解」することを指導する必要がある。

授業はリスニングで導入する

では授業でもヒアリングの指導から行うのか。時間が許すならそれもよいと思う。しかし多くの場合、授業時間は不足しがちであるので無理にヒアリング

から入ることはない。音の識別は徐々に行えばいいし、母音については全部を完全に習得する必要はない。もともと母音は地域的、社会的な違いが大きい。外国語として学習する日本人の場合は最低、日本語の母音と [æ] と [ə] でいいのではないだろうか。子音はそうはいかないが日本語にない子音を中心に指導すればいい。

授業導入の要点

これらを念頭において、授業は以下の点に留意して組み立てるのがよいのではないだろうか。

1. 聞いた内容を口頭で繰り返させる

このことで教師は正確に聞き取れたか、誤りがあったかがわかる。誤りがあれば指摘する。ただコーラスリーディングのような場合には1, 2人の誤った発話は全員の音声の中に埋もれてしまう。できれば個人で繰り返させて誤りを指摘するようにすることが望ましい。同じことを何回繰り返しても「誤りだ」と学習者に指摘しない場合には正しい学習は行われなと思うなくてはならない。

2. 繰り返すことで英語のリズムに慣れさせる

英語にはリズムがあることは頭ではわかっていても、実際には身につけていないことが多い。たくさん文を繰り返し練習する中で、全体として英語のリズムが身につけていく。1, 2個の文を繰り返してもリズムに乗ってこないことが多い。できるだけ多くの文を言わせることが必要である。日本人の英語が理解してもらえない場合、個々の発音が悪いというよりは、全体としてリズムが英語になっていないことが多い。日本語の高低のアクセントを英語の強弱のアクセントに換え、さらに強と弱が作るリズムを英語らしくしていく必要がある。基本的に名詞（代名詞を除く）、動詞（be 動詞や助動詞を除く）、形容詞、副詞が強く発話され、それ以外は弱くなること、そして意味によってはこのルールが崩れることを身につけるように指導しなければならない。ただ、このルールだけを覚えさせても実用にはならないので注意して欲しい。

3. 繰り返し練習させて、教科書に出てきた文すべてをできる限り暗記させてしまう

教科書で出た文は片っ端から全部覚えようと言っても、生徒はなかなか覚えようとはしない。そこで教師が教科書の文に近いパターンの文を何度も繰り返させれば全体を覚えるし、また疑問文や否定文を作成したり、質問と応答などを繰り返して同じ文を何回も口に出すように配慮すれば、無理に暗記させるよりも記憶が容易である。中学生は特に暗記が得意な時期であるので、このようにすればたくさんの文を覚えてくれる。特にリズムつきで覚えたものはリズムが出るだけで文が口をついて出てくるようになる。このためには無理に難しい文を言わせる必要はない。1, 2 個の単語を入れ替えただけの文をいくつも練習させればよい。

4. 練習は難しくする必要はない

メカニカルなものを最初に行い、心理的な圧迫感を取り去ることが必要である。置き換え練習などでは主語を次々に代えて動詞の変化などを考えさせる練習などがあるが、そのような複雑な練習をする必要はない。単純に主語を置き換えていけばできるような練習で十分である。置き換えを重視するのではなく、ターゲットにする文を繰り返して練習させるようにする。文の基本構造を習得させる。教科書には普通紙面の関係でたくさんの同じような英文が並んでいることはない。教授者は授業に行く前にいくつかの文を作って準備しておくとうい。さらにもし時間があればその後で置き換えだけの練習を行えばよい。すらすらと出てくるようになったら Q&A などを行って意味とその文を関連付けてやればよい。この作業は生徒同士のペアワークで行うことができる。

5. 音声での指導でスピードが遅い場合は繰り返し指導してスピードをつけるようにする

一般に教師は生徒が正しく言えれば練習はそれで十分とすることが多い。しかし実践的コミュニケーションをつけることを考えると、たとえ正しい文が言えてもスピードが遅いなら「それでは遅い」と繰り返し指導した方がよい。速く発話することでリダクションやデリションのような音声の変化を自然に

身につけることができる。したがって速く発話できても全体の文のリズムを乱してまで速くさせることはない。生徒があまり速く発話することに注意を払いきる場合には、教師が意図的にゆっくりとリズムをつけて言わせる練習も考えられる。英語のリズムに乗った自分に心地よい速度を身につけさせたい。

6. 速い文を聞き取ることができない

生徒の発話が遅いのではなくテープなどの速い文が聞き取れないのであれば、テープレコーダなどについているスピードコントローラを利用する。学習者に任せると速い発話の文をコントローラを使ってスピードを遅くして聞いたりする。しかし遅いものを何回聞いても速いものが聞き取れるようにはならない。使う場合には、録音時に遅いスピードで吹き込まれたテープのスピードを速くして聞き取る練習をさせる。録音時に速く読まれたものは音変化を伴う。これを聞き取るのは難しい。すでに音が変化したりなくなったりしているからである。速い英文を聞き取る練習をさせるためには、音変化のないゆっくり読まれた英文をスピードを上げて聞き取る練習をさせよう。

以上のような練習を通して速度をつけていけば色々な場面で時間を節約することができる。「考える」ことの指導は必要だが、本来考えなくてもすらすらと言えなければならぬ英文を言うのに無駄に時間を使って練習しては実用にはならない。できれば授業時間全体の中で学習者が英文を言っている時間を3分の1は取りたい。これはかなりの時間である。あいさつも最後のまとめもすべて含んだ数字である。授業の中心となる時間のほぼ半分をとることになる。英文を次々にぶつけて言わせるようになると、「英語が自然に出た」と報告があるかもしれない。子どもたちは「できるようになる」ことが大好きである。授業で練習を繰り返し、「自然に英語が出てきた」と言われるのは英語教師にとって何よりもうれしいことではないだろうか。その後で本文の内容についてじっくりとみんなで考える。こちらは学習者の知的レベルを上げるためにもじっくりと考える時間をとりたい。そのために教科書は題材に力を入れているのだから。